

皆の広場

素人の歴史考⑥ 「出雲古代史・出雲神話」

自文科 永野 徹

○ [出雲の遺跡地図]



[1] 出雲古代史（記紀・出雲風土記・出雲神話）

(1) 出雲の古代

1) はじめに

神の国出雲は明治27年、世界に出雲を紹介したラファエル・ハーンで有名となった。古事記、日本書紀では出雲神話が3分の1を占めているが出雲風土記と全く異なる。古代の出雲地域国家はその勢力が大きく東部と西部の2箇所に分かれていた。斐伊川の下流で出雲神社のある西部と意宇川中心で安来を含む東部の2箇所。記紀では斐伊川下流の出雲西部の須佐・杵築が中心で本体の東部は登場しない。最終的に出雲全体を支配したのは東部のオウ王であり、後の出雲臣である。

出雲神話(別紙参照)

(国引神話)

オミズ神の出雲国つくりは、霜黒葛(シモツツラ)の端を東は伯耆国大山に、西は石見との境にある三瓶山に括りつけて、志羅紀(しらぎ)の三崎、能登の都都三崎などを国引きして現在の宍道湖・中海を囲ったと言う雄大なスケールの神話である。

荒神谷遺跡

- ・1984年出土、2世紀半頃の遺跡で古墳ではない神奈備・仏経山の祭祀場が大量(358)の銅剣発見その後銅剣・銅矛の同場所出土で考古学上の注目。銅剣・銅矛・銅鐸と全て揃って出土した出雲地域の弥生後期の遺跡。
- ・東部の意宇(オウ)平野の大型方墳群とは異なり、出雲西部の祭祀遺跡か

- ・意宇(オウ)氏が東(安木)～西(簸川)・杵築まで支配し海上も制覇していたか
- ・出雲風土記にある独自の建国神話を持つ東部の勢力はいつ頃出雲へ進出か(出土品)
- ・原出雲時代の古墳、現地の神奈備山は仏経山で杵築～出雲三崎の祭祀。
- ・弥生中期～後期(BC1～AD3)で同剣(358本)、銅矛(16本)、銅鐸(6個)と大量
- ・銅矛、銅鐸が同時に出土(九州の銅矛文化、大和但馬の銅鐸文化の影響)

出雲地方国家の誕生

出雲の古代史の流れを下表に示す。

年 代	西部(記紀神話)	東部(出雲風土記)
1世紀	原出雲国家	—
3世紀	荒神谷遺跡? 吉備氏の進出	—
4世紀半	神原神社古墳	造山1号古墳
5世紀初	崇神記(神宝)	鶏塚古墳
5世紀末	意宇王支配 (吉備衰退)	熊野神、神魂神、国引神話 祭祀権の統合(語部の原形)
6世紀末	物部氏の神宝検校 蘇我氏の神門川浸入	山代二子塚古墳
6世紀末、 7世紀初	西部・東部統合 ヤマトの律令制浸透(部民・屯倉) 意宇王 → 出雲国造に任命(出雲国造神賀詞)	
8世紀初	国造忌部宿禰の子首の着任	

(出雲風土記)

713年に全国の国衙に対して国々の地名、軍備、道路物産、故事等を纏めて提出するよう布令したが、出雲では遅れて20年後733年に出雲臣広嶋が提出。出雲風土記は、記紀と内容がかなり異なっており、独自の伝承を伝えている。例えば大国主命(オホナムチミコト)の別名である・大穴牟遲神(オオナムチミ)・大己貴命(オオナムチミコト)は出雲風土記では、大穴持命(オオナモチミコト)となっており、「天の下造らしし大神、大穴持命、越の八口を平らげ賜いて」と、記述されているが、大穴持命が天下を造った「天つ神」になっている。記・紀の大国主命「国つ神」とは別神である。出雲風土記に出てくる神須佐乃烏命は本来、大穴持命のことであるが、出雲臣広嶋は大和朝廷に遠慮してスサノミコトにしまったのであろうか。

風土記の編纂者

733年出雲国造で意宇群の出雲臣広嶋と秋鹿群の神宅臣金太理等が編纂。当時の古代出雲の中心は、考古学的にも意宇群にあったと考えられている。書記の出雲神話ではオオナモチ神は「国つ神」であるが、出雲では「天つ神」出雲風土記で国造り神(国つ神)はオミヅヌ神(八束水臣津野命)となっている。(国引き神話)

オミヅヌ神の出雲国づくりは、霜黒葛(シメツヅラ)の端を東は伯耆国大山の境にある三瓶山に括りつけて志羅紀(しらぎ)の三崎、能登の都都三崎等を国引きして現在の宍道湖・中海を囲ったと言う雄大なスケールの話である。

2) 出雲王国

1. はじめに

- 概 要
- ・4世紀～6世紀末まで意宇平野を中心とした出雲地域国家
 - ・支配地域は意宇平野を中心として西は出雲、東は安木まで
 - ・出雲風土記の国引き神話は出雲の建国神話と考えられる。
 - ・出雲の日本海航行の監視は西の杵築三崎と東の美保三崎であった。

- ・出雲の海からの外圧として新羅国、九州筑紫、越等日本海沿岸諸国
- ・神原(カンバ)神社古墳から卑弥呼時代の景初3年の銘入り神獸鏡が出土
- ・大和朝廷の物部十千根(モノハチネ)が出雲神宝(杵築の神の神宝)を調査。
- ・吉備から安芸の陸路を進出(松本一号古墳が吉備の湯迫車塚古墳と似る)
- ・出雲のウマシカヒサ・ウカズヌが「出雲フルネが大和朝廷の命令に従わない」と訴え出たので吉備津彦等を派遣して征伐したとある。
- ・6世紀に吉備勢力は大和で曾我氏に敗れて出雲から手を引き、東部を支配していた意宇王国に代わり、大和から蘇我氏勢力が神門川下流に進出
- ・蘇我氏は三次から神門川上流を経て出雲へ進出。出雲は新羅に直面しているので軍事対応を意宇王国に命じた。(欽明天皇)
- 方墳の他に前方後円墳が見られるのは、蘇我氏が須佐に進出した証かも。

出雲と越

古代出雲の象徴で畿内と異なる四隅突出型方墳は3世紀～4世紀半のもので、出雲に集中して安木には特に多いが、富山の杉谷古墳群にも存在するのは、出雲の勢力が何等かの方法で越にまで及んでいたと言う事になる。この頃ヤマトでは前方後円墳が主流であり完全に出雲は独立勢力であった。八束水臣津野命(ヤツカミスオミツノミコト)は新羅と島根半島を国引き後に「高志の都都の三崎」を国引き。つまり出雲勢力が能登半島珠洲まで及んでいた。神門群には高志郷があり、「イザナギミコトの時、日淵川を以って池を築造り、高志の国人等、到来たりて堤を為りき。・・」と越の住民が労役に服したと言う記載がある。

出雲勢力の越進出地点は富山の庄川と神通川の支流である山田村に大穴持命(オオナムチ:大己貴命)を祭神とする牛獄権現あたりを中心に砺波平野まで分布し45社ある。この内蔡神が大己貴命は29神社、スサノ(後から変神)は9神社である。牛獄は昔、久和先崎山と呼んでいたが悪者が農民を苦しめたので国造神大国主が牛に乗って悪者を退治したので牛獄と呼んだ。崇神天皇の時代に再び賊が現れ、大彦命が征伐に向かったが地の理に明るい賊のため苦戦していると1人の翁が現れて教示してくれたので勝利できた。命が翁に那を聞くと気多王(ケタウ)と答えたのでこの地に牛獄神社を建てた。この「越中一の宮伝記」出てくる気多王は能登半島羽咋にある気多神社であり、この地点も出雲が進出した地点であると考えられる。蔡神は出雲と同じ大己貴命である。

2. 出雲西部王国

- スサノ
- ・記紀によるとスサノは高天原で乱暴を働き、出雲の肥河に追放されて八俣大蛇を退治して助けた櫛名田比売と結婚して出雲に須賀神社を建立した。
 - ・スサノが高天原から降りた場所は島根県東部を流れ宍道湖に入る斐伊川
 - ・古事記では簸の川上流で岡山との県境に近い「鳥神の地」とされている。
 - ・ここでアサツチ神、テナツチ神にあって、越の八俣大蛇の退治を約束し娘の櫛奈田姫を得る。

フルネ

- ・出雲フルネは仏経山麓の西北から入海(宍道湖)との間の健部郷・出雲郷に拠点を置く出雲西部の豪族。四隅突出型方墳・来原一号墳も近くにある。
- ・BC22年頃斐伊川・神戸川流域の出雲氏4人兄弟等の支配分野以下の通り
出雲振根(イズモフルネ)・・・出雲・健部郷地域
飯入根(イイリネ)・・・日置・塩治郷地域
甘美韓日狭(ウマシカヒサ)・・・杵築郷地域
鷗濡淳(ウカドクス)・・・宇賀郷地域
- ・BC22年、崇神記で宍道湖の西部の出雲大神の杵築神宝献上を求めたところ飯入根が正直に申し出たが出雲振根(フルネ)が従わないので吉備津彦を派遣して討伐したとある。
- ・この神宝とは、武日照命(タケヒナテル)が「天より持ち来れる神宝」でそれが「出雲大神の宮に蔵む」とある。
- ・出雲フルネは一族と共に出雲大神の神宝を司ったものでその時筑紫まで出かけていた。すなわち九州と出雲杵築と交流が既にあったという事。
- ・弟飯入根はフルネの筑紫国からの帰国を待たずに神宝を大和朝廷へ献上したため、兄の怒りに触れて、イイ・イリネは殺害された。
- ・そこで弟の甘美韓日狭(ウマシカヒサ)らが大和朝廷に申し出たので吉備津彦(キビツヒコ)と武淳河別(タケヌカワ)らが派遣されてイズモ・フルネは討伐された。
- ・フルネが討伐された後、出雲西部は東部の「意宇宿禰」の支配下に入ったのではと言われている。(吉備の進出痕跡以外は無く明確ではない)

吉備勢力の進出

フルネ滅亡後吉備国家の管掌下にあったキツキ神の神宝を、ヤマト国家は物部千十根を出雲国に遣わしてBC4年垂仁紀に検校させたとしており、物部氏の功績が大きかった。

出雲の神門

吉備国家勢力は意宇王国とは三刀屋のキツキ大神神領の神門で勢力境界とした。オウ王もフルネ討伐の後、西部地域は吉備勢力に任せて様子を監視する形を取ったようである。神門は神陵国への入口のしるしで、三刀屋が1つ、他に門立村、南方には御坂山と荒鹿坂または三坂にあったようだ。

吉備の進出

フルネが吉備氏により討伐された後、4世紀末期ころに斐伊川上流に巨大な前方後方墳が築造された。松本一号古墳(長さ50M)と神原(カンバラ)神社古墳である。松本一号古墳は全長50Mを越える前方後方墳で吉備の湯迫車塚に酷似している。三刀屋川と斐伊川合流点近くに神原神社古墳がある。景初3年の三角縁神獣鏡が一面出土したことで有名な古墳。これ等両古墳は近畿の古墳の特徴が見られ、吉備からの進駐者の墳墓であろう。

吉備勢力の衰退

(雄略紀) 記紀の吉備氏討伐関係記事

- ・463年吉備前津屋(サキツヤ)が女や鳥を雄略天皇と自分に見立て戦わせ天皇に見た立てた方が勝つとこれを殺して楽しんでいたことが発覚し朝廷により虐殺された。
- ・463年吉備田狭(タサ)を任那に派遣している間に雄略天皇が妻を奪う。これを知った田狭は新羅に内通した。更に子・弟君と反乱を計画するが謀反は失敗におわる。。
- ・479年雄略天皇が亡くなると稚姫(ワカヒメ:もと田狭の妻)の子である星川皇子が反乱を起こすが失敗して吉備氏は砂鉄の山部を没収されて急速に没落した。

西部その後

その後、満を喫してオウ王が進出したが、大和朝廷蘇我氏との関係は不明。
・吉備氏の衰退により、出雲西部(杵築)王国は東部・意宇平野のオウ王の支配下に入ったが、そのオウ王に対して、吉備氏の討伐の部隊である大和朝廷中央の蘇我氏の支配が及び引き続き律令制に取り込まれていったと思われる。

3. 出雲東部オウ王国

オウ王・王国

全 般 出雲王国の統一者である「オウ王」の中心は現在の松江・安木＝意宇平野であり、吉備氏の衰退で東部も完全に支配したヤマトと緊張関係を保ち独自性を保持した。

国引き神話のある出雲王国(4世紀～6世紀頃)

- ・意宇平野を中心とする出雲東部には出雲風土記の世界である意宇(オウ)王国があった。
- ・意宇平野丘陵部に4世紀中頃、初めて巨大な王陵「造山一号方墳」が造られた。この後、全長50M近い中期の大型前方後方墳が造られたと言うことで意宇王の権威が増大し、小国家が形成されたことを示している。
- ・出雲特有の古墳で北陸まで拡がった四隅突出型墳墓＝四角い墳丘の四隅に石で張り出しを持つ方墳が集中(中国山脈の三次、北陸の富山にもある)
- ・出雲東部には熊野大社、神魂(カモス=カミスビ)神社があり、熊野大社は意宇川上流にあり、出雲の総社とされる地主神で水・農業神です。
国造火継、新嘗祭、火鑽り神事など古式ゆかりの神事を伝えることで有名。
- ・意宇川の下流に後に出雲国庁が置かれ、すぐ西方に神魂神社があり出雲国司忌部首子首(インベオヒトコオヒト)が忌部氏の祖先神とした可能性が大。
また神魂神社が西方に移って出雲大社となったという伝承もある。

墳墓 オウ王は意宇平野の東方、入海(中海)を望む荒島丘陵、更に北方の二つの入海(中海・宍道湖)を結ぶ水道(大橋川)に面して大形の方墳王陵を建設。
・5世紀後半から意宇平野の神奈備、茶臼山周辺に相次いで巨大古墳・大庭古墳群を築いた。全長100M近い山代二子塚、一辺40Mの二段造成の大庭鶏塚(方墳)等。
・吉備勢力の撤退後、中海と宍道湖に係る古墳としては朝酌の渡しに手間古墳(70M)、魚見塚古墳(62M)があり、両方とも前方後円墳である。

出雲の玉造

出雲において特に注目される生産は玉造である。特に碧玉製の勾玉が高級品。ところが出雲の古墳は外形・石室に較べて副葬品が貧弱で特に勾玉は殆ど無い。4世紀末頃、野白川上流の忌部川地域の住民に意宇国王の厳しい要求がでた。玉の生産を増産して貢納を増やすようにとの命令で各邑ごとに加工専門、石切出し専門、運搬専門と言うように力役が果され相当の負担となった。また集落には工作用の特殊なピットがある5M方形の工房が2～3箇所建てられ、この地域の集団は専門業者が増え、その分農業・漁業は女・子供の負担が増えた。このように玉生産は急速に発達し集団の長の古墳まで出現するようになった。出雲の玉作遺跡はすべて意宇郡内にあるが、古墳に勾玉は埋葬されなかった。

(神 社)

神魂(カモス)と熊野(クマノ)神 (カモス=カミムスビ)

出雲にはカモス神社と四大神(クマノ・キツキ・サタ・ノギ)があり出雲風土記にはカモス神の子神が七神と記載。(神崎・生馬郷・吉郷・楯縫郡・出雲・宇賀郷・神門郷にある)

地主神であった熊野大神の神格が農業神へ転化しオウの地に神魂(カモス)神の祭祀が調えられた。カモスは古事記では神産日神(カミムスビ)とされるが初代の出雲国司・忌部宿禰子首がその祖神と融合させたのかも知れない。カミムスビ神は元来から出雲の男神で造物主・創造神であることが解って来た。神魂神社は「大庭の大宮」と呼ばれ出雲大社のように有名でない。

カモス神

杵築の出雲大社より400年古い大社造りで神殿はトゲ葺きで高床式である。クマノ神 神殿の勝男木は三本、千木は内そぎ、障壁と内陣の位置は大社と逆の女造りである。一方熊野神社は祭神は須佐之男命(スサノ)で正殿造の本殿に入母屋造りの拝殿がある。地主神であるクマノ大神は水神・農業神・植林神である。。国引き神話に出て来る八束水臣津野命が杖を立てた「意宇の社」はカモス神の社。

サタ神 佐太神社は出雲二の宮で正中殿をを中心に南・北に神殿が建つ。祭神はサタ神・イサナギ・イザナミ・速玉男命・アマテラス・ニニギ・スサノを祀っている。

記紀のスサノ神

(須佐大宮)

なぜ記紀神話はスサノ神を大きく取上げたか。蘇我氏のもと新しい統一に入ったヤマト国家の古代貴族が初めて直接捕えた現地神が出雲須佐の男(スサノ神)であり、山中の神だけに自由に神格を轉移し易かった。

3)出雲の律令制

意宇宿禰 「仁徳即位前紀」に意宇宿禰が出て来る。

仁徳紀 「出雲臣の祖・意宇宿禰は倭屯田の屯田司で大中津彦皇子が横奪して耕作しようとした時、時の太子(兔道稚郎子)やオオサギミコ(仁徳天皇)に申出て倭直の祖吾子籠(アゴコ)を韓国から迎返り大中津彦皇子の不正を正した。」と記載。但し屯田・屯倉の設置は早くて蘇我氏(6世紀後半)の頃であるので仁徳天皇5世紀の話ではない。

- ・国造本紀などでは、5世紀頃に国造が任命されたとの記事もあるが最近の研究で早くても6世紀ごろである。地方へは律令体制の進展と共に進出したようである。・出雲では659年齊明天皇頃に日本書紀にはじめて出雲国造の任命の記事がある。

- ・6世紀半飛鳥・藤原に都の有った頃、出雲西部に律令の国造制度が進む。出雲岡田山古墳の太刀の銘に額田部が認められる。

- ・ヤマト国家の部民指定として額田部臣、出雲臣、語部臣等の痕跡有り
- ・出雲の国司として忌部首子首(壬申の乱功績者で書記編纂参加)が9年間在住した。

蘇我氏 吉備氏が出雲に勢力を張っていた当時ヤマト中央では物部氏が権勢を張っていた。ところが6世紀中頃、大和国家では物部氏を押えて蘇我氏が台頭してきた。蘇我氏は吉備国家を押さえる為に吉備五郡に白猪屯倉と児島の屯倉を、更に吉備の三原にも屯倉を置いた。ここから更に出雲へも通じた。即ち三原から安芸の安宿～備後三次～飯石郡来島郷～波多川～神部川に至る道である。この新しい道は鉄の産出と係るたたら道で蘇我氏の親しい秦氏(波多川の波多)が通じていたと考えられ、蘇我氏が須佐の地に進出した事を意味する。

前方後円墳 (シガ＝スガ＝スカ・アスカ、)

実際、須佐・神門にはソガ川(蘇我氏)が流れている。
蘇我氏の出雲進出はキツキ大神の祭祀権の掌握を目指していたと見られる。
この痕跡は神戸部川・斐伊川の下流域に6世紀後半に出雲では珍しい大型
の前方後円墳・円墳が相次いで神門(カド)で築造されたことから推測される。
円筒埴輪をもつ古墳で横穴式石室内に家型石棺のあるヤマト様式のもの。

出雲・大和ルート

この当時ヤマトと出雲を結ぶルートとして以下の5ルートが考えられている。

- ①大和～(木津川・桂川)～丹波～(日本海)～出雲のルート
・BC3年垂仁紀に野見宿禰が出雲から1000人の土師を呼寄せ殉死に代えて埴輪を埋葬を提案したと言う説話がある。この古墳は佐紀盾列古墳群にあるヒバシメ陵で丹波道主王の娘とされている。
- ②大和～(茅渟ヲ・紀伊)～(加古川・出石川)～丸山川(但馬)～出雲
・BC4年垂仁紀:日本海に出るルートでも大連物部十千根が出雲国神宝の検校に赴いたのは丹波の氷香戸辺(ヒカトヘ)の訴えを前提にするルート。
- ③大和～(茅渟ヲ・紀伊)～(瀬戸内海)～吉備～(旭川・高梁川)
～美作～横田～斐伊川～出雲
・BC22年崇神紀:大和国家が最初に出雲に進出したのは吉備津彦が武渟河別(タケナカワ)と出雲フルネ討伐した伝承でありその時進出したルート。
- ④大和～(茅渟ヲ・紀伊)～揖保川～播磨立野～(美作)～横田～斐伊川
～出雲・野見宿禰が大和を往来した事については、播磨の国揖保郡立野という記事がある。
- ⑤大和～(茅渟・難波)～瀬戸内海～備後沼田川(三原市)～沼田川・可愛川～三次～神門道～出雲
・杵築大神に対する神門は神門道の門立て村にあった。蘇我氏が吉備氏を包囲する意味で出雲神門に氏族のある秦氏の協力が出雲へ入ったルート。

出雲国造

古事記・日本書紀には出雲国造の任命を語る資料は殆ど無く、出雲国造は、7世紀半ば以降に初めて正史に登場するので出雲国造が5世紀に任命されたと言うのは無理がある。

- ・古事記垂仁段に『出雲国造の祖岐比佐都美』
- ・659年斉明記に「出雲国造に命じて神の宮を修厳せしむ」
- ・716年続日本記「靈龜二年二月以降に出雲国造及び神賀詞(カムヨコト)奏上。出雲国造任命の伝承として、不確かな「出雲国造家文書」があって、「天穗日命から数えて十七世の宮向臣」が初めての国造と註されているようである。十六世に意宇の「祖神意宇足奴命」を置き、十七世以下を出雲国造としているが信頼できない。

716年出雲国造神賀詞をオウ氏の国造就任と見るのが妥当かも知れない。

トネリ・ウネメ

出雲を統一してきた出雲国王は出雲国造の地位に着くと大和朝廷に祭祀権の奉獻ほかトネリ・ウネメ等の人的労役を求められた。

本来、舎人と采女両方出すのが普通であったが、出雲はウネメのみ貢進していた。726年、逆に舎人のみ貢進を命じられた。山背国へ移住した出雲一族が変わりに貢進していたのが律令制度により見直しがされたから。

評制の施行

・706年出雲では評制から郡制に移行し、オウ王出雲国造は意宇郡の群司に格下げ。出雲では特例で部民等の指定(玉作部、語部、屯倉、日置部等)は国造が指定していたが、新しい部民制では国造の権限外となった。
新しい行政形態とは出雲国造の支配領域下を、いくつかの行政区「評」に分ける事になった評制の施行である。評の施行は、639～642年の事業遂行時に派遣された総領と現地国司との談合で郡を設置している。
正式には701年浄御原令で評から郡制度に変わった。評制の施行は出雲国造にとって一国の統治者でなくなる重大な出来事となった。地方国家の王からヤマト国家の地方官である国造への新しい制度変化により地方国家の王が国造に指定される事で王としての権限はもぎ取られてしまった。
律令制以前の出雲国造から新しい国造への移行は一大事態であった。

大宝律令(701)

新国司制度の施行(702)

評から郡に変わったのは、701年の大宝律令施行による。702年諸国の国造が同時に召集され「諸国国造の氏を定め、その名を国造記に具す」との命令が

あった。出雲国造はオウ氏と言う称から出雲臣氏と登録され国造の名(果安)も記された。この後、国司として派遣される中央貴族の手に国造の支配権を委譲すべしの命令が伝達された。(702年)

708年新しい出雲国司として着任した中央貴族は、正五位下「忌部宿禰子首(インベノスクネオヒト)」でヤマト朝廷の古式・祭祀にもっとも通じたベテランでそれなりの配慮がなされたのである。更に彼が日本書紀編纂の重要な役割を果たす事になり出雲新国造果安と談合しながら記紀と出雲風土記の神話棲分がなされた。果安の要望はあったが次第に出雲国の行政権は諸郡司に分有されていった。出雲国造が持っていた行政的権限は急速に新国司と諸郡司の職掌となった。もと支配下にあった旧郡司は既に旧出雲国造と同等の官位を得てきた。

神賀詞奏上(716)

新しい出雲国庁は旧意宇国造庁舎の地に建設された。(現在の松江市大草町)716年、出雲国造果安は国司忌部宿禰子首と神賀詞の奏上に平城京に出向いた。神賀詞においてアノホヒノミコ(天穗日命)は「出雲臣等の遠祖天穗比命」とされている。

(2) 出雲神話

1)はじめに

明治27年に世界に出雲を紹介したラフカディオ・ハーンで有名な神の国が出雲である。出雲風土記の作成者は筆録者が神宅臣全太理(ミヤケノオミマタリ)で総監修者は出雲国造(クニノミヤツコ)・意宇(オウ)大領出雲臣(イズモミ)広嶋である。出雲神話とは出雲の国で伝承された神話と言う意味が本来であるが、一般には古事記、日本書紀の日本体系神話に出てくる出雲と関連づけられた神話群を想起する事が多い。例えばスサノオの八俣大蛇退治、大国主の因幡の白兔などしかし、記紀神話は出雲風土記の現地神話と全く異なる内容である。出雲風土記では記紀の出雲神話に全くみられず、雄大なスケールの出雲の国造り説話の「国引き神話」で有名である。

風土記の出雲神話は、出雲国造氏を中核として作成されたもので、記紀編者でもあった出雲国司斎部(インベ)氏により「原神話」は中央貴族にも届いていたはず。新らしい部民制度で出雲の語部は四人(須佐・古志・健部・意宇)となり、彼らを直接統率したのは国司でなく伴造であった。延喜式の大嘗会に出席して儀式で古詞を奏した出雲の語部は四人となっている。

出雲の語部が大和朝廷に奏上した原神話は取捨され変歪され、記紀神話が誕生。スサノオ神は当然須佐の語部から、出雲の国譲りは神門の語部から出雲神奈備語部の伝承は景行段・崇神紀・垂仁紀に記載、意宇語部の部分は「オオナモチ神がスクナヒコ神と共に国造りした」と簡単に取捨され変歪されている。

出雲国家のヤマト国家への服属は6世紀末から7世紀初で、記紀神話の原形は6世紀中頃には出来あがっていたという研究者の見かたもある。従って出雲征服の話は天武天皇時の国史編纂で付加された可能性が高い。

なぜ、出雲神話が古事記神話の3分の一を占めるのかについては、壬申の乱で出雲の神・豪族の活躍等以下の背景があると考えられる。

- ・出雲国造から高市社に和魂(ニギハヤヒ)が貢ぎ鎮められ、コシロヌシ神が高市県主許梅(コノ)に神がかりして大海人皇子軍の守護神になろうと告げたこと。
- ・出雲伯は近江坂田郡の玉倉部邑に出撃し、高島の三尾城を攻略したこと。
- ・記紀編纂事業に参画したのは川嶋・忍壁両皇子と四人の王と六官人でその内の最上位の官人につぐ地位にあったのは忌部連子首で最初の出雲国司。

(インベノムラジオヒト)

2)出雲風土記神話

国引神話 733年に勸造した「出雲風土記」に記載される出雲国意宇郡の国引神話。以下は、この出雲風土記の巻頭に出てくる雄大なスケールの国引き神話。

○地名由来(出雲と意宇)

- ・「出雲となづくゆえは、八束水臣津野命(ヤツカミズオミツノミコ)詔りたまいき、『八雲立つ』と詔りたまいき。かれ、『八雲立つ出雲』という。」が由縁。
- ・「意宇(オウ)となづくゆえは、八束水臣津野命、国引き終えて、意宇の社の御杖つき立てて、『意恵(オエ)』と詔りたまいき。」が由縁。

国引神話は前文六段より構成されている。

①八束水臣津野命が「初国は小さく作らせり」と述べて、今回改めて国引きする訳を説明している。

②一番目に新羅国三崎の国引き話(西部:杵築国・出雲神社の鼻高山山塊)

③二番目に弁辰十二国の佐伎国の国引き話(秋鹿群:狭田国の朝日山山塊)

④三番目に北方韓地の良波の国引き話(西南部の闇見国の嵩山山塊)

⑤四番目に高志の都都(珠洲)の三崎(東部の美保国の美保関山塊)

⑥意宇(オウ)地名の起源を説明

国引き後、固定する綱をかけた杭山が西方は大山で東方は三瓶山である。

意宇聖林 出雲創造の神にゆかりの深い森は「意宇の杜」である。

宋においては桑林が宋侯の崇廟であり、楽を奏して祭儀を行った場所。

韓国の同じような場所として新羅の古都慶州における鷄林の聖林がある。

新羅の建国伝説には朴・昔・金の三氏の始祖伝説があり、その開国神話は卵生神話・竜神伝説・聖林神話等があるが、神聖なる樹林に來臨する始祖神が、呪的信仰に基づく建国神話である。

意宇杜における一樹は八束水臣津野命が国引きを終えて意宇杜に突きたてた杖と附合する。

風土記の神統譜

出雲人が崇拝する神々と氏族の祖先神は高天原の神々の後裔とされた。

出雲風土記の神統譜と独り神について整理してみる。風土記に見える出雲の神々は;

①天の下造らし大神オナモチ神(意宇の出雲国王)

②カミスビ神③スサノ神(須佐に地に生まれた神)④独り神とであるが、カミスビ神とスサノ神は子神との婚姻でオナモチ神で結合される。

②カミスビ神は島根部・出雲部・神門部の地の神で、出雲部のアヤトヒメ神と

神門部のマタツクリタマノムラヒメとがオナモチ神と婚姻関係でつながる。

サタ大神の母神も出雲部・神門部の両神と姉妹関係であり、1つの系統になるオナモチ神の子神はアジスキヒコ(加茂神戸)もヤミノヒコ(山代郷)もがんらい出雲東部の神々であった。

残るはオナモチ神と意宇のクノ大神と神魂(カモス)=カミスビ神との関係がどうか。

意宇国のクノ大神は本来農業神・穀物神で、国造りには対応できない神格。

そこで国引き神話のオミヅヌ神が必要となる。この神は出雲部・島根部の創造神と見られ出雲全体の国造り神とされ古事記ではスサノ神の4世孫神である。吉備勢力が出雲から撤退した6世紀前半にカント(神門)勢力を制圧して出雲国家の君臨した国王により「国引き神話」が整えられてオミヅヌ神が祀られるようになったと言える。またカモス(カミスビ)神も元来出雲の神であった。

3)記紀神話

記紀神話におけるスサノオの神格はそのどれもが出雲須佐の人々のスサノ神の原像と全く異なる。

スサノオ神をヤマトの貴族が発想した当時の背景として、大和政権の六世紀後半出雲支配地が出雲神社のある波多・須佐・神門・杵築等の出雲西部であった事が影響していると考えられる。

出雲風土記に見えるスサノオの神格は案外単純で、本来山の神・水の神であって農耕神ではない。記紀神話ではクシナダヒメ・カムオイヒメ(神大市比売)・コノハナチヒメ(木花知流比売)との婚姻を伝えるが、出雲風土記では婚姻神話は1つもない。ヤマト貴族は須佐の首長や一族をあえて大切にせず征服神話を創りあげた。記紀神話の出雲国譲り神話と「武諸隅の神宝献上命令」・「出雲フルネの飯入根謀殺」・「景行段の倭タケル命による出雲タケルの征服」が説話の類型として同一と見れる。

古事記は出雲国造の祖神は「天菩比命(アメノヒ)の子、建比良鳥命(タケヒトリ)とし日本書紀は出雲の祖神を「天穗日命(アメノヒ)」としている。ところが記紀本文ではアメノヒ神は出雲を征服した高天原の神として出雲に出向いているにも拘らず出雲臣氏は出雲国造神賀詞において自ら自分達の祖神と呼び始めてくる。但し出雲国造神賀詞は服属賀詞がかなり早い時期に出来ていて後から出雲の主要神の和魂貢上が割り込まれた経緯があったのではと言われる。

出雲国造りの新たな祖神造りは8世紀以降ではないかという意見もある

山瀬国愛宕郡の出雲臣一族は本宗家よりも現地の山背国司に差配されてアメノヒ神やその子アメノヒナリ神を祖神とした。

出雲西部本宗家の神門臣氏は祖神をウカスクヌ、同郷の土師部として大和へ貢ぎ出された人々の祖神ウマシカラヒコ⁸の伝承を残しながら、究極的にはアメノヒ

- 神の後裔と称した。
- 1.古事記 出雲神話** 712年完成の古事記は、天武天皇の命により稗田阿礼が暗誦していた勅語の旧辞を聞き取り太安万侶が元明天皇に奏上したもの。
古事記の目的は天王家の伝承を核として諸氏の始祖伝承を訂正させる目的で天武天皇の天皇氏観による系譜の確定を行ったものである。
天武天皇の時、一端完成した天皇親政の個人的な編纂物とされている。
古事記に出雲国が登場するのは、①スサノオ神話②大国主神話③出雲国譲り神話の三つの神話だけである。
- ①スサノオ神話
- ・スサノオは天照大神の弟神として登場して、天上界で狼藉を働き根の国へ追放される事になっていたが邪心がない事を主張して天照にウケイを挑戦してから乱暴狼藉により根国へ向かう途次に出雲へ立ち寄り、ヤマタ大蛇退治など善神となり、助けた櫛名田比売を娶り、須賀神社を建立した。
4代目が八束水臣津野命、6代目孫が大国主である。
- ②大国主神話
- ・大国主神と兄弟八十神の話から始まる。大国主は多くの神名を持つ。
(大国主神の別名=オオナムチ、アシラノコオ、ヤチホコ、ウツクニタマ等)
 - ・八十神に命を狙われ、その都度神魂命に助けられ、その庇護の下スサノオのもとへ逃れる事ができた。
 - ・大国主は根の国でスサノオ娘スセリ姫を貰い、生太刀、生弓矢、天詔琴等の武器をもって根国を出て出雲の国の八十神を退治して宇賀山に宮を造り出雲統一をなす。
 - ・越の沼河比売との夜這い、長文の贈答歌記載あり。(当時の男女間の相聞歌)
- ③出雲国譲り神話
- 国つ神である大国主の統一した葦原中津国に対して天つ国・天照から地上の支配権を譲るように最終的に建御雷之男神(タケミカヅチノカミ)が派遣されてニギハヤヒ命が降臨する。
- 2.日本書紀 神話伝承** 720年完成の日本書紀は史書的性格を顕著にしており、中国の正史に対比するわが国の正史として国家的編纂物として舎人親王らが中心となって藤原不比等の検閲のもと元正天皇に奏上された。
この時期、701年に大宝律令が制定されて律令国家が完成の域にあり、内外に日本の国家的地位を確立する意図があった。
従って書記は個々の歴史的事実に詳細な年月日を与えて書記紀年を定めた。
また同一物語に多くの異説があるときは全て併設する形を取っている。
国家の政治運営は皇親から官僚貴族に移り国家中心の編集方針が取られた。
古事記の神話体系が天地開闢に筆を起し宇宙の根源としての天御中主神から始まるのに対して書記では造化の三神説は採らずに国常立尊(クニトコタチノミコト)を立て、国の確立から始まる。従って神話部分は相当少なくなっている。
- スサノオ** 書記では坐坐をこねるスサノオに対してイザナギが根の国への追放を命じている。総じてスサノオを根の国の神と決定している。
スサノオの八俣大蛇退治のあと、出雲の須賀で奇稻田姫と神婚し生んだ子供が大国主となっている。
- 大国主** スサノオが奇稻田姫(クシイダヒメ)と交わり御子大己貴命(オオナムチ)を生む
大国主の書伝は僅かに第六の書に治められているだけで詳細な建国の物語はない。スクナヒコと協力して天下を統一した。
- 国譲神話** 大国主と事代主の談合で事代主神が国譲りを承諾したので大国主も止む無く同意して譲った。

4) 記紀出雲神話の概要

1. 記紀のスサノオ命

- スサノオ乱行** 三神の内スサノオ命だけが母の住む根の堅州国に行きたいと暴れまわる
- 追放** イザナギはスサノオの乱暴を咎めて葦原中国(地上の国)から追放を命じた
同時にイザナギ大御神は近江の国・多賀神社へ隠居された
- 誓約(ウケイ)** スサノオはアマテラス大御神に別れの挨拶に高天原(天安河)を訪問
- 占い** スサノオの身の潔白証明の為ウケイ(誓約)により子を産む事になる
アマテラスの子・五柱男神誕生(大和朝廷):スサノオが生んだ(アマテラスの勾玉から)
スサノオの子・三柱女神誕生(九州宗像神社):アマテラスが生んだ(スサノオの剣から)
- アマテラス** 誓約(ウケイ)の後スサノオは高天原で暴れだしアマテラスは天の岩屋に隠れる
天の岩屋]アマテラスが隠れて高天原も葦原中国も暗闇となり禍が広がる

(天岩屋神社:宮崎県高千穂・・・高千穂夜神楽)

アマテラス天岩戸踊り:

オモイカネ(知恵の神)の演出でアマテラスを呼び戻す儀式を八百万の神が催行

役者:アメノウズメ(猿女)の神楽踊り、フトダマ(鏡:忌部)、

タデカラオ(岩戸を開く)アヤノコヤネ(祝詞)、イシコリドメ(鏡製作)、

タマノオヤ(珠製作)

「スサノオの地上支配」

スサノオ出雲の国へ

天の岩戸事件でスサノオの罰は「千位の置戸」と髭剃り、爪きりで追放され出雲の国、肥河(現斐伊川)にやってくる

スサノオ 老夫婦(アサツチ、テナツチ)と娘クシナダ姫が八俣の大蛇に食べられると泣いていた。そこでスサノオはヲロチを退治する代わりに姫を貰う約束をし実行した。

八俣ヲロチ 退治した八俣のヲロチの尻尾から三種の神器の一つである「草薙の刀」が現れたのでアマテラス大御神に献上。ヲロチ退治後クシナダ姫を得て出雲の国に神殿(須賀の宮)を建て周囲には垣根を八重に廻らせた。

スサノオ命 美しい雲と姫に感動して日本初の和歌を詠じた

※八重垣神社(島根県松江市):スサノオとクシナダ姫を奉る神社

日本初の和歌

「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣つくる その八重垣を」

2. 記紀の大国主

大国主の命(オホクニヌシノミコト)

出雲に住むスサノオの6代目の子孫オホアナムヂ(オホクニヌシ)は稲羽のヤガミ姫に求婚に赴く途中で皮を剥がれた素兎を助け姫に認められる

結果、八十兄弟神に嫉妬を買い命を狙われ根の堅州国に逃げスセリ姫と結ばれるスセリ姫の父(スサノオ)の試練をパスしてオホクニヌシの名を頂き、兄弟神を押えて国造りを開始して葦原中国を統治する。

(大国主の別名)

・オオアナムヂの神(穴の中の偉大な人):因幡の白うさぎ事件とヤカミ姫求婚

・アシハラノシコオの神(地上の国から来た醜男の神)

・ヤチホコの神(多数の武器を持つ神)

・ウツシクニタマの神(世界を象徴できる国の神)

・大国様:神仏習合思想で大きな袋を持つインドの神様大国天から命名。

(因幡の白うさぎ)

・スサノオの6代目子孫:オホアナムヂ(オホクニヌシノミコト)には八十神の兄弟あり

・ヤガミ姫に求婚の為に稲羽に行く時八十兄弟神の荷物を背負わされた先発の兄弟神は白兎海岸で赤裸の白兎に酷い治療方法を教えた為にあまりの痛さに白兎が泣いているところへ、オホアナムヂ遅れて到着して正しい治療により忽ち傷は癒えました。この話はヤガミ姫に伝わり大国主が求婚相手に決まりました。

(オホクニヌシノミコト(兄弟神からの受難))

スサノオ6代目 ヤガミメ(現:鳥取県八頭郡八上)を奪われた八十神は怒りオホアナムヂの殺害を企てる。真っ赤に焼けた岩を投げつけたり、大木の裂け目に挟んだりして紀の国まで追掛けた。

・紀の国からスサノオ命の根の堅州国へ逃れる

(スサノオからの試練):蛇・百足虫退治、野焼攻め、シラミ退治

・スサノオの試練を克服して太刀・弓を貰い娘スセリ姫と結ばれる

出雲の国支配

・スサノオからオホクニヌシ命と名前を貰い兄弟神を支配して出雲の国を治める

葦原中国国・常世国スクナヒコと大和三輪山オオモノシの協力で葦原中国の国造り完成

(スクナヒコ:農耕・経済の神、オオモノシ:祭祀の神を大和の東の山に祀れ)

「天照大御神が大国主に国譲りを要求」

・オホクニヌシによって統治完成した葦原中国をわが子に譲れとアマテラスが要求

御子の派遣失敗

・アマテラスの御子達を使者として地上に派遣するが失敗する。

アメノシホミ(長男):天の浮橋から地上を見下ろし地上の神々の喧騒を知り中止

アメノホヒ(次男):次の使者・アメノホヒは地上に降りてオホクニヌシに靡いてへつらう

アメノワカヒコは地上でシタデル姫と結婚し連絡不通で派遣されたナギメを弓で射殺し

地上を支配する邪心ありとの反逆と見なされて還し矢で命を落す

武神タケミカス・度重なる失敗で強力な武力の神タケミカスと天船の神アメトリフネを派遣

・大国主の子ヤヘコシロヌシは戦わずして降参、次の息子タケミナカハはタケミカツチと

の力比べで敗れて諏訪へ退散。(美保～高志～諏訪湖)まで追いやられる
国譲り準備完了

- ・敗れたオオクニヌシは隠居宮殿として超高層の高さ48mの出雲大社の設立を交換条件として国譲り完了(10月に国中の神様が縁結に出雲へ集まる:
(故に一般的には10月は神無月であるが、出雲は神在月)
- 天孫降臨・高天原神の地上支配が確定するとオシホミミの子ニニギが地上に降臨
- ニニギ命!・ニニギは高天原から日向の高千穂に降りる(ニニギはアマテラスの孫)
- 三種神器・アマテラス大御神から三種の神器(勾玉、鏡、剣)を授けられた
- 同伴者・アメノヤネ、フタマ、アメノウズメ、イコリトメ、タマノオヤ、オモイカネ、タジカラオ、
ニニギの結婚 アメノイトワケ。
- ・笠沙岬(鹿児島県・野間岬)でコノハナサクヤヒメに会い妻とする
- 天皇の寿命・父オオヤマツミは姉イワナガヒメも姉妹婚で差出すが醜い姉を追いついた為天皇に
寿命が発生。姉妹婚の意味「姉は石のように永遠の命を、妹とは花のよう
に繁栄するとの意」

5)出雲神話事例(2件)

1.大国主命(オオクニヌシ)：出雲の国(古事記より)

- ①稲羽(因幡)の白兔(うさぎ)の歌
「大きな袋を肩にかけ、大黒様が来かかると、そこにイナバの白うさぎ・・・」
子供の頃、特に深い考えもなく唄った童謡ですがこの歌の背景を古事記により検証:
- ②大国主命(オオクニヌシ)とは
 - ・出雲神社の神様
 - ・大国様とも呼ばれる(大きな袋を荷う姿がインドの神様に似ている故の別名)
 - ・スサノオ尊の子(ヤシマジヌミの神)の6代目孫で「偉大なる国の主の神」
 - ・大国主命=オホナムジ=アシハラノシコオ=ヤチホコ=ウツシクニタマ
 - ・大国主命は八十神の兄弟の中で「地上の国から来た醜男」と呼ばれていた
- ③なぜ「赤裸」の素うさぎ:
 - ・隠岐の島から出雲まで海渡りの為にワニ(鮫?)を一行に並ばせて背中を渡り終え最後の一匹ワニに出雲に渡る口実である旨うっかり真実をバラした為に皮を剥れた。(類似神話はインドネシア、ニューギニア、インドにもあり、出雲ではワニでなく鮫サメ?)
- ④なぜ「白兔海岸」
 - ・稲羽(鳥取県八頭郡)の美しいヤガミヒメに求婚の為に、オオクニヌシ命は八十の兄弟神の従者とされ全員の荷物を担いで、兄弟神から一足遅れて白兔海岸に辿り着くと兄神達に悪戯で偽の治療を受け痛みで泣いている赤裸の白うさぎに会い正しい治療法を教示して元気に回復させる。
- ⑤赤裸の白兔の治療
 - ・先発の八十兄弟神は白兔海岸で丸裸の素兔に出会い、悪戯心で偽の治療法「塩辛い海水でしっかり洗い岩場で横になっていれば直に治る」を教えた為傷が酷くなり、大国様が重い兄弟神の荷物を担いで白兔海岸に到着すると岩場の上から可哀想な白兔の泣き声が聞こえてきたので、「海に流れてくる河の真水で塩を洗い流して蒲の穂を集めて敷き寝転がって療養するように」と正しい治療を教えたのでやがて美しい白い毛皮が生えて回復した。
- ⑥ヤガミ姫の結婚相手
 - ・この兎は「因幡の白うさぎ」はヤカミ姫の御用を果たす兎であったことから姫は結婚相手として「オオクニヌシの命(オホナムジの神)」を選びました。

2. スサノオとクシナダヒメ結婚：(古事記・出雲風土記)

- スサノオの乱暴行為をイザナキが怒り高天原から地上の国へ追放(出雲へ)
葦原中ツ国(地上の国)出雲で八俣の大蛇退治し三種神器:草薙の刀取得
- ①八俣の大蛇(ヤマタノオロチ)を退治、クシナダ姫を妻として須賀神社を建立。
 - ②スサノオの命は、神殿の周りに垣根を八重に廻らせクシナダ姫を籠った。
この時出雲の雲の美しさと妻(クシナダ姫)に感動してスサノオが和歌を詠じる:
(日本最初の和歌)
「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣つくる その八重垣を 」